

と云を以、名づけしにや、土人おもへらく、地もと玉を出す、古歌に詠玉浦これなりと、海東諸國記に、尾路關とあり、圖書編、三才圖會、登壇必究並に和奴密智と書す、皆此地を云なり、別に市令を置て是を治む、市後及び左右は皆郡村の所管なり、東西北は背後地村の地繞りて、村の諸山列り、南は海にて向島と對す、その間纔に六町を隔つ、この地山を負ひ海に臨みて、人家櫛の如く立ちならび、中に官道あり、縦横に街巷を分つ、源貞世、道ゆきぶりに、北にならびてあさぢ深く、岩ほこりしける山あり、ふもとにそひて家々ところせくならびて、網ほすほどの庭だにすくなしといへり、貞世の時既にかくのごとし、今は實に尺寸の地をあまさず、諸國往來の舟船こゝに輻湊し、百貨交易便を得て、富商多く、西國の一都會なり、

〔太平記^{十六}〕本間孫四郎遠矢事

本間孫四郎重氏、○中澳ナル船ニ向テ、大音聲ヲ舉テ申ケルハ、將軍○足利筑紫ヨリ御上洛候ヘ

バ、定テ輒、尾道ノ傾城共、多ク被召具候覽、其爲ニ珍シキ御肴一ツ推テ進セ候ハン、○下

〔道ゆきぶり〕備後になりては、中々名高きかたよりも、面白きところこそおほかりけれ、入海うちつゝきて磯ぎははるかに行めぐるに、あまのすみかども、山もとちかきも、げにかた、よりありと見ゆ、足引のやまわけくだりて、おのみちのうらにいたりつきぬ、この所のかたちは、北にならびてあさぢふかく、岩ほこりしける山あり、ふもとにそひて、家々所せくならびつゝ、あみほすほどの庭だにすくなし、西よりひんがしに入うみとをく見へて、朝夕しほのみちひもいとはやりかなり、○下

〔藝備國郡志^{備後土地}〕三原。在御調郡、西洋往還之街衢、而船舶之所輻湊也、城外仟陌四通也、土地

坦平、天候和暖、民人庶富、

〔藝藩通志^{備後}〕三原府 疆域形勢